

【追悼】ずるいよ！ 笠置さん！

ブログ「旗旗」草加 耕助 2005.10.03



笠置華一郎さん

先日、知り合いから、元戦旗・共産同の代表代行だった笠置華一郎さんがメキシコで亡くなったらしいというメールをいただき、しばしモニターの前で呆然としました。私は泣きたいのにまったく泣きませんでした。まるで砂を握り締めるような、体の水分が枯渇したような、そんなやりきれなさに、その時はとらわれていたのです。

党の最高幹部でありながら、いつも闘争の前面に立って若いメンバーを守って闘う姿、革命に対する少年のような純粋な思いと正義感、そして私生活での決して満たされることのない寂しさ、この三つが渾然一体となった人物。それが私にとっての笠置さんでした。

「偉大な革命家」としての笠置さん

やはりまず何よりも、私が初めて会ったときの笠置さんは、元日大全共闘の闘士であり、荒さんと共に戦旗・共産同を創設したメンバーの一人であり、元全国労共闘議長であり、そして荒さんが獄中にいた期間の「党首代行」として3・26管制塔占拠闘争を指導した偉大な革命家でした。

笠置さんは常に現場では部隊の先頭に立ち、若いメンバーの後ろ盾となり、そして機動隊の弾圧などには火を噴くような抗議をされていました。機動隊のほうが多くて劣勢の時も、笠置さんが来ると一気に雰囲気が変わったものです。一方で、他の戦旗派の誰よりも党派人であり、組織人だった。それは官僚的な意味での組織人間ということではなく、自らの情念と正義感と革命への情熱といった心情的なものを、「党」という現実的・物質的な存在へと昇華した姿だったように思います。そういう意味でも理想的な革命家だったと思います。

私が知る中で笠置さんほど「革命家」という言葉がぴったりくる人はいなかったと思う。「活動家」はたくさんいた。「理論家」もいた。中には「政治家」や「陰謀家」、「政治ゴロ」みたいなのもいた。自己という存在に拘泥するあまりに「反組織人」になる人もいた。そんな中で笠置さんの存在は傑出していたと思う。うまく言えなくてもどかしいのですが、ちゃんと自己を保ちつつ、それを組織の中に昇華しておられました。

酒とゲバラを愛する少年のような革命家

これは月並みな表現ですけれども、笠置さんはまるで「少年のような」としか他に言いようのない目と笑顔をしておられました。傍から見れば絶対に「党のエライ人」とは思えないほど、誰に対しても気さくな笑顔でごく自然に声をかけられ、親身に相談にのり、酒をこよなく愛し、飲むと革命とチェ・ゲバラを語る人でした。

だいたい結集したばかりの若い活動家の「恋愛相談」にのったり(しかも紋切り型の組織的見解ではない)夜通し親身になって「恋ばな」につきあったりしてくれる「党の最高幹部」が他の組織のどこにいたでしょうか(笑)。

そして何よりも、笠置さんが酒を飲んで語る「革命」はとても純粋で美しかった。しかもそれは一方的に語られるのではなく、いつも私に問いかけ、語りかけながら、内面に深くしみいるものでした。私の革命観、左翼観は、笠置さんから得たものだと思えます。そしてそれはそこから「マルクス主義」の理論を取り除いたとしても、今もって私の人生を決定づける指針を与えてくれる力を持つものです。

と、いうか、私の記憶の中では、あまり笠置さんが「理論」を語っているのを見たことがありません。戦旗派の文献に収録されるような論文などもほとんどなかったと思います。私は笠置さんと一緒に生

活していた時期がありますが、話はいつもゲバラであり、中国革命であり、ベトナムであり、韓国民衆であり、そして三里塚農民でした。荒さんとはたまに接する程度で、近しく会話する機会もほとんどありませんでしたが、荒さんの著作は多いから、その内省的で謙虚な文章に感動したりしました。その時は笠置さんの話と荒さんの著作に矛盾はなかったのです。この二人が私の政治的な「師」ということになるでしょうか。

余談ですが、私は戦旗派のパラチエン(左翼思想の放棄)後の荒さんの文章を読んで愕然としたことがあります。それは「共産主義のように人々に倫理を押し付けるようなことは無理がある」という趣旨でした。私は「そうだったんですか、荒さん！」と叫びたくなりました。それは「(共産主義は)無理がある」という部分に対してではありません。私達が目指した革命を、荒さんが「一般大衆に特定の倫理観を押し付ける」ものだと理解していたことに対してです。これは笠置さんがいつも語っていた「人間解放の思想としての革命」とは180度正反対の革命理解です。その当時は矛盾がないと思っていた二人ですが、やはり根本的な人間性のところで二人は随分と違っていたのかもしれませんが。

ふと見せる寂しい横顔

実は笠置さんは荒さんなどより遥かに破天荒なところがあって、若い頃は随分と女性遍歴を重ねたこともあるといます。学生結婚をした後も、それはおさまらなかった(と、自分で常々語っておられた)。それはレーニン主義的な規律に反した「誤った自由恋愛主義的な傾向」であると自己批判されているのを(酒を飲みながらですが)何度も聞いたことがあります。

こう書くと、なんだか「破天荒な英雄が色を好む」みたいなエピソードですが、実際はそうではありません。なぜそんなことをしていたのかということについて「寂しかった」と語っておられた。結婚すれば、この寂しさが何とかなると勘違いしていたと。二十歳そこそこの私にはよくわかりませんが、その後の人生で、この「寂しさ」を抱えた人に何人も出会うことになります。そして私も自分の中にこの「寂しさ」を発見していくことになりました。

めったにご家族の住む自宅(もはや「自宅」と言えるような状況ではなかったと思いますが)に帰ることはできませんでしたが、それでもごくたまに帰った時には、当時小学生だった息子さんのことを、私によく話してくださいました。子供に何を伝え、何を残すことができるのか、それは私に話すというよりも、自問自答しているような感じだったのでしょうか。のちに離婚された奥さんのことは、あまり話そうとはされませんでした。とても気を使っておられるようにお見受けしました。いろんな思いがありすぎて、言葉にならなかったんだらうと思います。

風の噂に消息を聞いて

それはともかく、私は組織を離れてから、笠置さんの消息をまったく知りませんでした。まだネットもなかったですしね。でも、他の戦旗派幹部の消息などは興味なかった(Jさんゴメン(-人-))けれど、笠置さんの消息だけは知りたかった。戦旗派が正式に革命を放棄したあと、あの笠置さんはいったいどうしているのかと。

なぜなら、古今の哲学者の名前を並べたて、普通に日本語で「組織の活動家」と言やあいいものを、わざわざ「ブントのアクティビスト」などと言い換えてみたり、とかく小難しいカタカナ言葉を乱発する今の「ブント」に、私の知る笠置華一郎さんはおよそ似つかわしいとは思えなかったから。

やがてネットが普及したある日、私は思い立って2ちゃんねる掲示板の該当スレッドで、笠置さんの消息を尋ねてみたことがあります。そこで返ってきた答えは「上福岡に左遷され、毎日飲んだくれていたが、何を考えたか任務を放棄して今さらキューバへと逃げ出した」みたいなものでした。SENKI紙上にキューバからの投稿が載ったこともあるそうですが、10年以上運動の世界と縁が切れていた私は知りませんでした。しかし私はむしろこのレスに安堵したくらいでした。「キューバかあ！」と思いました。ゲバラを熱く語っていた笠置さんを思い出し、そうだ！それでいいのだ！と思った。

当時は戦旗派創設以来の古参幹部の現状について、ろくな話(噂)を聞けなかった。基本的にはみんな「左遷の上パージされてしまった」というのがそれでした。おそらく「革命家・笠置華一郎」の居場所は、今の「ブント」にはないだろう。戦旗派は変わってしまった(と、いうか、すでに無くなってしまったというほうが正しいでしょうが)し、また、荒さんも変わってしまったから。

しかし笠置さんにおよそ「内部抗争」だの「荒さんに反旗を翻す」だの、ましてや「分派」なんて行動は似合いそうもない人ですから、それだったら笠置さんのキューバ行きの選択は最良のものの一つだろうと思ったわけです。ですが、同時に、自己の人生と革命の未来を、すべて「戦旗・共産同」という組織に賭けて半生を生きてきた笠置さんにとって、そこにいたる思いはどのようなものだったろうかと、勝手に想像して勝手に心を痛めました。誰のせいでもないかもしれない。でも、忸怩たる思いがしたことも事実です。

砂を噛むような悔しさの中で一訃報の第一報を聞いて

その後、笠置さんがキューバを離れてメキシコに渡ったことを聞いたのは、つい最近のことでした。「なぜメキシコか」ということについては知りませんでした。また、現在のSENKIの活動家が、笠置さんについては否定的な評価をしている、あるいは最大限善意に解釈しても「パラチエンについてこれなかった過去の人」的な見方をしているらしい印象をこの頃に持ちました。もちろん笠置さんの人間性ゆえに、回りの人からは親しまれていたようですが、それでも、私のように偉大な先達として尊敬したり、その生き方から学ぼうという姿勢とは違うもののように感じていました。

そこへもってきての突然の訃報です。しかも「裏切られた革命家」トロツキーと同じメキシコでの客死であるという。

悔しかった！私はいつの日か、必ずまた会える日がくると信じて疑っていませんでした。その日を楽しみにさえしていたくらいです。後悔の念が押し寄せました。そして同時に、笠置さんのような左翼の宝とも言うべき、傑出した古参革命家が居場所のない組織にした荒さんに、苦労を共にした同志に尊敬をあらわさない(と私には見える)その姿勢に、わたしは憎しみさえおぼえたのです。

私は笠置さんの死とその晩年を、その時に「悲しい」と思いました。「やりきれない」とも感じた。せめてその死が孤独なものでなかったことを心から祈りました。そしてだれかと笠置さんについて語り合いたかった。知り合いにメールを送りまくり、さらに2ちゃんねるにまで書き込みました。しかも気持ちがずさんで慌てていたのでしょうか「笠置さん」が「笠木さん」になっているのも気がつかないままで。

幸福だった笠置さんの人生

ところが・・・です。往々にしてこういうものは、すべてが終わってから情報が集まってくるものです。

いや、それ以前に私はなんで今まで「笠置華一郎」でネット検索をしなかったのでしょうか！！

結構知っている人も多かったようですが、私は知りませんでした。「共産趣味」関係のページには行かないので、この手の情報には疎いんです。この「カサ・カサ」のページに出会ってから、一気に笠置さんの消息についての情報が入ってきました(知ってりゃ教えてくれれば良かったのに！)。



笠置さんは97年に自分の意思と決断で日本を離れた後、文字通りの「世界革命浪人」としてキューバに渡られ、そこで2年間を過ごした後、中南米各地を旅しておられたそうです。そしてその途上でメキシコ先住民の民族解放運動であるサパティスタ民族解放軍(EZLN)に出会い、その活動に共感。そしてサパティスタの存在と活動を伝え、支援するため、日本人宿「カサ・カサ」を立ち上げておられたのです。SENKIのサイトにも03年10月5日の日付で笠置さんの投稿文(現在リンク切れ)が残っていました。

それにしても、この「カサ・カサ」のページは、なんて素敵な追悼ページなんだろう！私のコメントとしては僭越すぎると思うけれども、作者の片桐さんにはどうしてもお礼を言いたい。

心から感謝申し上げます。下にある写真も、「カサ・カサホームページ」から許可を得て転載させていただいたものです。

あはは、笠置さんだ。髪もトレードマークの髭もすっかり真っ白だけれど、それ以外はあまり変わっていませんね、笠置さん。子供達に囲まれて、なんて幸せそうなんでしょう！あは、やっぱりゲバラのTシャツなんて着ちゃって。

ずるいよ！笠置さん！私なんかよりずっとずっとずっとずっとずっとずーっと！何倍も幸せそうじゃありませんか。



良かった……。

ここまで書いて初めて涙があふれてきました。今、号泣しています。

今まで泣けなかった。自分は冷たい人間なのかとさえ思った。でも、笠置さんは幸せだったのだ、自分なりの人生をまっとうしたのだとわかった瞬間、自分でも驚くほどの涙が堰を切って一気にあふれだしてきました。

良かった。本当に。心が溶けたようです。涙が止まらない。本当に。

笠置さんはやっぱり笠置さんだった！

でも笠置さん、あなたは一人になっても、組織なんてなくなっても、どこの国へ行っても、やっぱり笠置さんのままで、少しも変わらなかったんですね。どこに行っても周りの人から好かれてしまうんですね。羨ましい！

おそらく晩年は、ブントがどうの荒さんがどうの、そんなことはちっぽけなことに思えたでしょう。SENKIの人たちに対しても、他の人に対するのとまったく変わらずに接しておられたようです。

これは簡単なことのように実際はすごいことです。自分が創設し、一度は「最高責任者」をつとめながら、最終的にはそこから離れざるを得なかった党派なのです。こういう場合、だいたいの年寄りには、愚痴ったり、今の組織に「批判」ならぬ難癖をつけたり、あるいは過去の栄光や武勇伝を繰り返して語るだけの毎日だったりするものです。でも、そんな形跡が微塵もない。

きっと毎日が充実して忙しくて、思い出しもしなかったかな？大勢の若者が笠置さんに協力していたようですね。追悼ページを読んでも、笠置さんが過



去を愚痴ったり、武勇伝を誇るなどという姿勢とはまったく無縁で、常に現在と未来を語り続け、絶望ではなく希望を語り、そして語るだけでなく精力的に行動し続けていたことがわかります。そしてそれが「年寄りの冷や水」などではなく、実際に大勢の若者の心を打っていたことも。

バトンを握り締め直しながら

笠置さん、あなたが私達にしてくれたこと、手渡してくれたバトンを、きっとメキシコで出会った人々にも手渡し続けておられたのでしょうか。

やっぱりあなたは凄い人だ、笠置さん！それはわかっていたはずなのに、まだまだ私はあなたを見くびっていました。脱帽です。ぐうの音もでません！やはりあなたは私の生涯のお手本だった。

先にも書いたように、笠置さんには左翼思想における「理論的業績」はほとんどありません。しかし笠置さんの業績とその魅力は、その人生の「行動」と、語った「言葉」そのものの中にあります。その遺産は活字の中ではなく、笠置さんと接した多くの若者達の心の中にこそあります。その志は多くの若者が受け継ぎ、発展させていくでしょう。そしてそれこそが笠置さんが生きたことの証であり、マルクス主義や左翼理論をも越えて後世に残り続けていくものです。

私はあなたからいただいたバトンを、見失いかけていたかもしれない。一人になっても、組織がなくなっても、どこへ行っても、私は私です。もう一度あなたからいただいたバトン握り締め直し、残りの人生を生きていきます。どうか見守っててください。そして安らかに。

それから、どうぞゲバラにもよろしくお伝えください。

メキシコ日本人宿「カサ・カサ」について

笠置さんが旅立たれてから、「カサ・カサ」はしばらく閉鎖されていたようですが、片桐さんらの尽力によって、11月下旬からは再開されるそうです。また、ここにある晩年の笠置さんの写真は、すべて「カサ・カサ」からお借りしたのですが、掲示板にて使用許可をお願いしたところ、片桐さんより以下のような丁寧なレスをいただきました。

草加耕助さん、是非写真を使ってください。昔の同志の方々の温かいメッセージが最近あちこちで見られます。笠置さんの人望と徳に改めて思い知らされた気持ちです。カサ・カサのHPのものは全て笠置さんのものと思っていただいて、笠置さんの気持ちをよくご存知の方々に自由に使ってもらって結構です。

片桐さんは党派時代の笠置さんをご存知ありません。そして私はメキシコ時代の笠置さんをまったく知りません。しかし共に笠置さんの遺志を受け継ぎ、後世に伝えていくために、私もできるだけの協力はしていきたいと思えます。



それにしても、もう一年、いえ半年でも早く「カサ・カサ」の活動を知っていたら、このブログとも連携しながら、笠置さんといっしょにいろいろな活動ができたらうにと悔やまれてなりません。

いえ、もう悔やむのはやめましょう。過去を教訓にはしても、過去にはとらわれなかった笠置さんの精神を受け継いで、前を向いて歩いていきたいです。

以下、「カサ・カサ」ホームページにあった片桐さんのメッセージを転載しておきます。私も家族がなければすぐにでも世話人に応募したいのですが。。。でも、管理人じゃなくて世話人としたところが、笠置さんらしいなあ。なるほど、旅人の「管理」ではなくて「世話」をする人ですか。

創設者、放浪する革命家、笠置華一郎。彼の最後の舞台であった日本人宿カサ・カサ。カサ・カサの始まりは、笠置さんのこの時代への挑戦の最後の舞台として、多くの旅人が考え、発信し受信する舞台として生まれました。そして、今カサ・カサは新しい意味を与えられようとしています。たくさんの人と出会い、受け入れ合い、共同していくこと。自分自身の枠を、世界を広げること。そうした経験を求める人々に、世話人(宿主)という場を提供する宿として、存続しようとしています。新たな世話人(宿主)を募集します。半年、一年、三ヶ月・・・短い期間でもかまいません。少しでも、カサ・カサという空間が作り出す歴史の歩みに協力して下さる意志があるなら、このアドレスまでご連絡ください。hataraitehatarait@hotmail.com たくさんの人々がつながり、あらゆる世界がありうる世界を。